

## 神を愛する者となる

ローマ 8 : 28

2022年は今日のローマ8章28節「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」を指針聖句、「神を愛する者となる」を指針としたいと思います。この聖句は私たちにとって大変力強い、慰めに満ちたみ言葉です。信仰者に与えられる幸い、祝福がここにはっきりと告げられています。「すべてのことを働かせて益としてくださる」。「すべてのこと」がです。私たちにとって好ましく、喜ばしい事だけでなく、悲しい、辛い、苦しいと思われる事も含めたすべての事が、私たちの益となるように働く、それも原文では「共に働く」という意味があり、そこに大きな慰めと励ましがあります。つまり悲しいことと嬉しいことはつながっているということです。私たちのこの世の人生には、多くの悩みや苦しみがあります。どうしてこんな目に遭わなければならないのか、と思うようなことが起ります。そういう体験の中でこのみ言葉は、苦しみ悲しみも最終的には私たちの益となるように働くのだと語り、それを信じて、忍耐して苦しみ悲しみと戦っていくように私たちを励ましています。そして事実、苦しみや悲しみのまっただ中にいる時には分からなくても、後になって、あの時のあの苦しみによってこういう恵みが与えられた、苦しみが結果的には益となったと気づかされることが起ります。その時に私たちはこのみ言葉は真実だったと感じるので。

聖書の原文を読みますと、この28節の冒頭に「私たちは知っています」という言葉があります。この聖書では最後に来ている「私たちは知っています」が、原文では最初にあるのです。パウロは「すべてのことを働かせて益としてくださる」ことを「私たちは知っている」と言っています。「そうなればよいと願っている」という願望や願いではなくて、そのことをはっきりと知っているということです。パウロがそこまで言い切れる確信はどこから来るのでしょうか。これまでのパウロの人生経験からそう確信しているのでしょうか。もしそうなら、パウロであれ私たちであれ、このように確信をもって言うことはできないのではないのでしょうか。なぜなら、私たちが直面する苦しみは常に新たなものだからです。たとえこれまでの歩みにおいては苦しみが結局益となったことを体験してきたとしても、今度もそうなるとは限りません。苦しみのさ中にいる時に私たちは、過去の経験や体験があるからといって安心することはできません。「すべてのことを働かせて益としてくださる」と確信をもって語るができる根拠は、過去の人生経験ではないのです。ではパウロは何を根拠にこの確信を語っているのでしょうか。

それを知るためにはこの8章全体の文脈の中でここを読む必要があります。すぐ前の26-28節には「知る」という言葉が連続して語られており、それが話の流れを作り出しています。先ず26節には「私たちは、どのように祈ったらよいかわからない」とあります。この「わからない」は「知らない」ということばです。私たちの弱さは、どう祈るべきかを知らないことにあります。それは、言い換えれば神との間に確かな関係が築けていないということです。自分で思いつくまま勝手な願いを一方的に神に告げることはできても、相互の愛と信頼に基づく関係を神との間に築くことができない、そこに私たち人間の弱さがあります。自分の中でどう結論づけても最終的な確信を持たないのが私たちの祈りです。しかし、どう祈ったらよいかを知らない私たちのために、聖霊が、父なる神と私たちの間に立って執り成しをして下さっているということです。執り成しとは、両者の間に正常な関係を築くために労することです。こちらが歪んでいたとしても真っすぐなものに整えてくれるということ、こちらに不足があればそれを補ってくださるということです。私たちの内に宿って下さっている聖霊が、言葉に表せないうめきをもって、祈れない私たちのために、私たちに代って、祈って下さっている。神は聖霊のうめきを祈りとして聞き取り、それによって私たちを知って下さる、つまり私たちと正しい関係を持って下さるのです。その意味において私たちが安易に自分の願いや思いをただただ申し述べて祈るというよりも、神の御心がはっきりと分からず、うめくように祈りながらも、時には祈りがことばにならない時も神が最善のことをなしてください

ることを信じて地上の歩みを進めてゆくことの方が信仰者らしいと思うのです。

パウロはここで「わたしたちは知っています」と言っています。このことを知っているのはパウロ一人ではなくて「わたしたち」です。その「わたしたち」とは、神の霊、聖霊の執り成しによって、神が遣わして下さった独り子イエス・キリストを信じる者とされ、洗礼において主イエス・キリストと結び合わされ、自分が主イエスと共に神の子とされている私たち、つまりクリスチャンたちです。「神がすべてのことを働かせて益としてくださる」というのは、全ての人に普遍的な真理として語られていることではありません。これは、神が自分を子として知って下さっていることを知らされ、信じた者こそが知ることのできる真理なのです。苦しみが結局は益となったという人生経験のあるなしはそこでは何の関係もありません。聖霊の執り成しによってキリストと結ばれ、神の子とされた者は、パウロと共に「神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、わたしたちは知っています」と語ることができるのです。

「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々」と語られていることが、そのことを示しています。「神を愛する者たち」それが信仰者です。信仰をもって生きるとは、神を愛して生きることです。良い行いに励むことが信仰なのではありません。それは神を愛することの結果として起って来ることです。信仰者が神を愛するのは、神が、愛される資格のない罪人である自分を愛して下さり、キリストの十字架の死と復活によって罪を赦し、神の子として下さったからです。つまり神様は御子イエス・キリストのいのちと引き換えに私を神の子としてくださった。いのちがけで私を愛して下さったのです。そして子とされた私たちが、父となって下さった神を愛するのです。ですから神を愛する私たちは、神のみ心が行われることをこそ求めます。神のみ心を思わずに自分の願いや望みばかりを神に叶えてもらおうとしているとしたら、それは神を愛しているとは言えないでしょう。時々、自分の願いや望みがかなった時には神が自分を愛していると受け止め、そうならなかったら神は私を愛していないと理解する、それは神を愛するとは言わないのです。

「神に愛されている」誰でも最初はここから出発です。愛されていることを体験できないまま、愛しなさいと言われてもそれは無理というものです。なぜならどうやって人を愛したら良いのか、どうしたら神を愛したら良いのか分からないからです。生まれつき神を愛する者となっている人はいません。信仰者となるのは神に愛されていることを知ったから、キリストが私のために十字架にかかって下さるほどまでに私を愛して下さっていることが分かったからです。しかし、信仰者として歩む中で神に愛されているからこそ、私も神を愛して生きるという自発的自主的な生き方に少しずつ変わってゆくはずで、それが奉仕であり、礼拝です。それは神を愛しているということの表現ですからそこには喜びこそあれ、不満や義務感、やらされ感は無いと思います。神を愛して生きる、つまり神の愛に答えて生きるということが無ければ私たちの信仰生活は神様の愛情を試し続ける人生となってしまうのではないのでしょうか。

ですから「すべてのことを働かせて益としてくださる」というのは、全てのことが自分の願い通りになることではありません。私たちの愛する神のみ心が成ることです。私たちの願いや望みは実現しないかもしれません。苦しみや悲しみからの救いも、自分が願っているような仕方では実現しないかもしれません。しかしそれでも、私たちの父となって下さった神のみ心が全てのことに於いて実現するならば、それこそが私たちにとっても真実の益となるのです。そのことを信じて、神のみ心の実現を願い求めることが、神を愛することであり、神を信じて生きるとはそういうことなのです。

私たちクリスチャンは、神の御計画によって召され、主イエス・キリストによる救いにあずかり、父なる神の子とされた者です。その私たちの歩みは神の救いの御計画の中に置かれており、全てのことが神の恵みによって私たちの救いのために益となるように共に働くのです。しかしそれは私たちの人生から悩みや苦しみや悲しみがなくなってしまうことではありません。また悩みや苦しみを大したことはないとして余裕をもって受け止めることが出来るということでもありません。神を愛する者として、信仰者とし

て生きることは簡単なことではありません。信仰をもってこの世を生きることは基本的には苦しみの歩みなのです。しかし私たちの内に神はご自身の霊、聖霊を宿らせて下さっています。聖霊が私たちの内で、言葉に表せないうめきをもって執り成して下さっているのです。だからこそ、うめきながらも明日に向かって歩みだすことが出来るのです。最後に信仰者と信仰を持っていない方へみことばが示すことを話して終わりたいと思います。

先ず信仰者への語りかけ・・・それは神に愛されることを求め、神の愛を追求する段階から、主体的、自発的に神を愛する者へと成長するということです。そこでは礼拝すること、奉仕すること、つまり神と人に仕えることが喜びとなり、そのことによってますます神に愛されていることが分かります。ちょうど子供の時には受けるばかりであったけれども、年齢を経て親の立場に立ってみると自分の親がどんなに自分のことを心配し、愛情を注いでくれたのが分かるように、神に愛され、神の愛を求める段階から、神を愛する者となってゆきたいと思います。そのような信仰者が一人でも多く起こされることが教会の成長につながってゆきます。

次に信仰を持っていない方への語りかけ・・・神は全ての人を愛しておられますが特にイエス・キリストに示された神の愛を信じ、受け止め、応答する人を特別に扱われます。ですからイエス・キリストを救い主と信じ、従う者となってください。人から「クリスチャンになるとどんな良いことがあるのですか？ なんかメリットがあるのですか？」と聞かれることがあります。そんな時に「クリスチャンになったからといって急に願ったりかなったりの人生を送れるわけではありません。突然、頭脳が冴えたり、特別な才能を発揮できるわけでもありません。それは 100%不可能とまでは言いませんが。しかし、クリスチャンになると何が良いかというなら安心して悩むことが出来ます。神があなたの味方になってくださるのです。そのように答えます。

この年、「神を愛する者となる」ことを目指して歩みだしたいと思います。